

先鋭と調和 新鮮な選曲

日本現代音楽協会は、第一次世界大戦の惨禍を経て設立されたISCM（国際現代音楽協会）の日本支部にあたる。今回は、本家の音楽祭百周年を記念して昼・夜と連続した2つの演奏会が設けられた。

一般に作曲とは「音の高さ」を操作することだと考えられている。しかし、21世紀に入ってから顕著なのは、ノイズまで含めたさまざまな「音色」を、疾走するリズムのうえで跋扈させる傾向だ。ここでは、ドなのか、レなのかよりも、シュワシュワなのかザクザクなのかといった、音の肌触りこそが問題になる。

ギター1本による高速の連打音が、雑音をまき散らしながら変化してゆくシモン・ステーン||アナーセン「ウィズイン・アマンダスト」は、まさにその典型だろう。続く増田建太、ユグ・K・マルコヴ

評 | ISCM “世界音楽の日々、100周年記念コンサート

イッチ、フランチェスコ・フリデイらの作品も、ざっくりいえば同様の趣向。ポップスにも似た時間感覚を備えた、切っ先の尖った音楽である。

やはり恐ろしいほどのスピードで多彩なノイズを響かせるフランク・ベドロシアン作品では、サクソフォンの大石将紀||写真||が凄絶な演奏を展開。曲と一体化した姿は、まるで舞台のうえに、ひとつの細長い音響体があらわれたようでもあった。

逆に、こうした曲が大半だったからこそ、サククスとピアノが調和と不調和のあいだを揺れ動く徳永崇作品のユーモア、そしてチェロの倍音の美しさをそのまま提示したカイヤ・サーリアホ作品のしなやかさを十全に味わえたようにも思う。

最大の功労者は、互助会的な平等主義に陥りがちな「作曲家団体の主催する演奏会」において、新鮮な選曲を実現した同協会国際部長の福井とも子。この日のように考え抜かれたキュレーションを多くの企画が見習ってくれば、現代音楽は変わる。

（音楽評論家・沼野雄司）

—7日、初台・東京オペラシティリサイタルホール。



撮影・堀田力丸